

## 実践研究

# ドイツ語授業における「めやす」概念を活用した「つながり」の学習効果の考察<sup>1)</sup>

田原 憲 和

### 要 旨

1 回生時の初修外国語授業では知識の集積が最重要課題である。しかし、限られた時間や知識量であっても、学習言語の先にある世界を知り、それに触れることは、学習のモチベーションを保つためにも非常に重要である。そこで、つながりの実現を目指した外国語教育を提言している「外国語学習のめやす」<sup>2)</sup>の概念を導入して行ったプロジェクト型授業の実践例から、「つながり」を主眼に置いた授業を提案するとともに、「めやす」の課題も指摘する。

### キーワード

初修外国語、ドイツ語教育、「外国語学習のめやす」、プロジェクト型授業

## 1. はじめに

多くの学習者にとっての初修外国語は大学入学後に初めて学習する言語であるため、とりわけ1回生時の授業においては文法や語彙などの学習が中心になり、学習言語を用いたアクティブな活動は限定的である。また、筆者が担当するドイツ語については、中国語などの近隣諸国の言語と比較すると日常生活からはかけ離れた言語であり、教室外において学習者がドイツ語やドイツ語話者に触れることはほとんどないというのが現状である。

しかしながら、外国語学習は単にその学習言語の知識を蓄積することだけを目指しているのではない。学習を通じてグローバル社会に対応した言語の使い手を生み、社会に貢献し、社会の発展の一翼を担う人材を創り出すこともまた外国語学習の役割の1つである(當作 2013: 95)。そのためには、初期段階より学習言語の先にある文化や社会とのつながりを意識して学習することが重要であり、それが学習意欲向上につながっていくのである。

そこで筆者は、2013年度の授業において、ドイツ語話者やドイツ社会とのつながりを目指す目的で「めやす」の概念を導入したプロジェクト型授業を展開した。本稿では、その授業実践の報告を行うとともに、アンケート結果から明らかになった「めやす」概念を導入したことによる効果およびその課題について述べていく。

## 2. 「めやす」とは

### 2.1 「めやす」の目的と特長

「めやす」は公益財団法人国際文化フォーラムが16人の提言者とともにより2012年3月に発表した「外国語学習のめやす2012」をもとに作成されたものである。元来、「めやす」は高等学校での中国語および韓国語教育の質の向上と促進を図ることを目的としており、学習の指針を作成することをめざすものであった（「めやす」2003：4）。「めやす」の中で「今後中国語・韓国語以外の外国語教育関係者をはじめ、言語教育、国際理解教育、ひいては教育関係者全体との連携を深めながら、グローバル人材づくりと学習者の人間的成長に貢献する、より普遍性のあるものに成長させていきたい」と述べられているように、現在ではこの理念の浸透を図る活動が積極的に行われている<sup>3)</sup>。

「めやす」は教育理念、教育目標、学習目標の三本柱を掲げ、それを授業づくりや学習目標を達成するための学習内容・学習活動に反映させていくという構成をとっているところにその特長がある。以下では、「めやす」をより深く理解するために教育理念、教育目標、学習目標を順に追っていく。

### 2.2 「めやす」の教育理念<sup>4)</sup>

「めやす」は「他者の発見 自己の発見 つながりの実現」をその教育理念として掲げている。すなわち、外国語学習を単に言語学習に限定するのではなく、外国語の学習を通じて自他の理解を深めながら関係性を築き、協働社会を創ることを目指している。

他者は自己を映し出す鏡であり、他言語・他文化との対象により自言語・自文化の再発見や再認識が可能となり、他者との交渉において自己そのものの再認識にもつながるとしている。

しかし、「めやす」の最大の特長ともいえるのが、「つながりの実現」である。外国語の学習を通じて他者と自己を発見し、認識することにとどまらず、自他の理解を深めることで、相互の「わかりあい」と新たな価値の「わかちあい」に発展し、真の意味でのつながりの実現に至っている。つまり、表面的な言葉のやりとりによるコミュニケーションの実行ではなく、あるいは学習言語の背景にある文化や社会を無条件に称賛し受け入れるといった片務的な活動でもなく、双方向的な理解と交渉によって摩擦や軋轢を乗り越えていくための能力を養成するという点に主眼を置いているのである。

### 2.3 「めやす」の教育目標<sup>5)</sup>

「めやす」の教育目標を簡潔に表現するならば、「ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てる」ということにある（「めやす」2013：5）。具体的には、外国語学習の目標は外国語能力の向上に留まるものではなく、多言語・多文化が共生する21世紀のグローバル社会を生き抜くための力として、外国語による対話力、多様な他者と付き合う力、グローバルな視野を持って社会に参画して活動する力を身につけることを目標としている。そのためには時間をかけて豊かな感性と資質を育まねばならない。とりわけ2.2で挙げた教育理念を実現に移すために次のような資質が必要であるとしている。

まず、他者と向き合うためには「寛容性」「共感性」「他者への尊重の念」という資質が、次に自己と向き合うためには「内省力」「自尊感情」「自主性」「自律性」という資質が、最後に自他の関係性の構築や社会づくりのためには「創造性」「柔軟性」「責任感」という資質が必要であるとしている。「めやす」では、外国語教育を通じてこれらの資質を身につけるための活動を行っていくことを目指しており、教育の目標としている。

## 2.4 「めやす」の学習目標<sup>6)</sup>

「めやす」理念を実現するための学習プランを作成する際に具体的な指針となるのが、この学習目標である。簡潔に表現すると、「めやす」が掲げる学習目標は、総合的コミュニケーション能力を獲得することである。そのキーとなるコンセプトは、3領域×3能力+3連携である。ここでいう3領域とは「言語領域・文化領域・グローバル社会領域」を、3能力とは「わかる・できる・つながる」を、そして3連携とは「学習者・他教科・教室外」との連携のことである。これらをまとめると、次の表1のようになる。

表1 3領域×3能力+3連携の内容<sup>7)</sup>

		能力		
		わかる	できる	つながる
領域	言語	A. 自他の言語がわかる	B. 学習対象言語を運用できる	C. 学習対象言語を使って他者とつながる
	文化	D. 自他の文化がわかる	E. 多様な文化を運用できる	F. 多様な文化的背景をもつ人とつながる
	グローバル社会	G. グローバル社会の特徴や課題がわかる	H. 21世紀型スキルを運用できる	I. グローバル社会とつながる
+				
		関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる		
		既習内容・経験／他教科の内容とつながる		
		教室の外の人・モノ・情報とつながる		

表1からも明らかなように、「めやす」では外国語の授業を単に言語教育に留まるものとは考えられていない。言語教育については3つの領域のうちの1つを占めるに過ぎない。すなわち、グローバル社会に対応する人材を外国語の授業を通じて総合的に育成するということが「めやす」の根幹にある。また、この3領域および3能力については優先順位が設定されていない。一般的に、例えば能力面においては、知識として理解し（わかる）、それを運用し（できる）、他者とのコンタクトをとる（つながる）という流れが想定されるが、「めやす」においては最初歩の段階でも「つながる」活動をすることも可能なのである。

この3×3+3の表で掲げられている項目は授業設計のための指針となる。同時に、プロジェクト型授業の目標を明示化することができるという利点もある。

### 3 「めやす」を導入した授業

筆者は、「めやす」の理念を自らの授業に反映させるため、1つのクラスで実験的にプロジェクト型授業を行った。従来から筆者はプロジェクト型授業を行っているものの、今回の対象クラスが初の「めやす」導入クラスである。

#### 3.1 プロジェクト概要

今回のプロジェクト型授業の対象は、立命館大学法学部1回生の「ドイツ語・展開」クラス(2013年度後期開講)である<sup>8)</sup>。ドイツ語の履修を始めて2セメスター目の学生が31名の登録があった。「ドイツ語・展開」は週に2コマの履修となっており、週1コマの「ドイツ語・表現」と合わせて学生は週3コマのドイツ語科目を履修していることになる。

このプロジェクトは、「立命館大学の魅力を伝える動画をドイツ語で作成し、YouTubeで世界に発信してみよう!」という目標を掲げて実行した。プロジェクトの実施期間は11月初旬から下旬で、7回の授業にまたがるものであった。しかしながら90分間全てをこのプロジェクトに費やしたのは撮影日の1回だけであり、他の6回に関しては授業の一部(10~30分程度)をこの作業に充てるに留まった。そして、プロジェクト終了後に授業内で上映会も行った。

プロジェクト実施に当たり、クラスを8つのグループに分け、撮影に使用するiPad miniを配布した。撮影後の編集には動画編集アプリのiMovieを使用した。なお、当該クラスでは2013年度前期の「ドイツ語・基礎」においても動画を作成するプロジェクト型授業を行っていたため、撮影および編集に関する一定のスキルは習得済みである。

#### 3.2 注意点および成果物

プロジェクト実施に当たり、①「見てもらう」ということ、②「授業の一環である」ということを注意点として特に強調した。

まず①「見てもらう」ということは当然のことのようであるが、ややもすると学生は自分たちの世界に入ってしまうがちであるためにあえてこれを強調した。ここでいう視聴者とは、YouTubeにアップロードした後にこれを視聴する可能性があるドイツ語話者を意味するが、同様に意識すべきなのは同じ学習者、すなわちクラスメートである。いずれにせよ視聴者がいるということは、きちんとした発音で、聞き取りやすいドイツ語を話すことができるかということが重要となってくる。特に、同じ学習者がこれを視聴して内容を理解できるかどうかとも考えて作成するように強調した。

次に②の「授業の一環である」ということの意味は、「全てが評価対象である」ということである。単語や表現、構文などを教員に質問して解決するのではなく、自分たちで考え、グループのメンバーと協力しながら解決していくということである。そのため、教員側からのフォローは限定的なものに留めた。

そして本プロジェクトにおいて最終的に提出をさせた成果物は以下の3点である。

1. 動画
2. 単語リスト
3. 台本（日本語、ドイツ語）

まず、1の動画については最も重要な成果物であり、評価の主たる対象となる。2の単語リストについては、作成者の知識の整理という意味合いもあるが、それ以上に他グループの学習に資するものである。どのような点に焦点を当てて動画を作成するかは各グループによってかなり異なっている。しかし、「食」や「図書館」など、各テーマに絞ってまとめた単語リストは学習者にとっても非常に有益なものである。そのため、個別に調べて獲得した語彙知識をできる限りクラス全体でシェアするために単語リストの作成も課した。

台本についてもほぼ同様の意味合いである。日本語版とドイツ語版の台本を作成し、配布することで、様々な表現方法の知識をクラス全体でシェアすることができる。さらに、教員にとってはそれ以上にこの台本を提出させることが重要となる。台本は評価の際にも用いたが、それ以上に学生の理解度を把握するためにも有益なものとなった。

### 3.3 「めやす」との関連性と評価方法

既に述べたように、当該クラスにおいては2013年度前期にも動画作成を伴うプロジェクト型授業を行っている。しかしながら、本プロジェクトは「めやす」概念を導入したという点が大きく異なっている。

作業の手順としては、いずれの場合もグループでテーマを設定し、動画を撮影するという点は全く同じである。しかし今回に関しては、明確に視聴者像を設定し、その視聴者の立場になって動画の内容そのものを考えていくという段階を経ている。実際に相手（この場合は動画を視聴するであろうドイツ語話者）の存在を想定し、彼らにとって何が興味深いものであるのかを考察することが、つながりを実現するための第一歩である。その上で、自らが持っている情報（この場合は立命館大学に関するもの）をどのように提示するかという、内的な交渉を行うことで、すでに一部においてつながりが実現しているといえる。

中国語や韓国語学習者と異なり、ドイツ語学習者にとって自らの周辺にいるドイツ語話者は大学の教員だけという場合がほとんどである。一般的に決して身近とはいえないドイツ語話者とのつながりを考えていく際、このような内的交渉は非常に有効であるといえる。

では具体的に、本プロジェクトは「めやす」とどのように関わっているのでしょうか。本プロジェクトで行う活動内容を「めやす」の教育目標である3×3+3の表に当てはめると、その対応関係は次ページの表2のようになる。

表2から、本プロジェクトの学習目標は広い範囲にまたがっていることがわかる。しかし、必ずしもこれら全てを評価の対象とするわけではない。一般的に、プロジェクト型授業についてはどのように評価をするかという基準の設定が困難である。活動そのものを評価するという指標だけでは、学習者にとっては具体的にどの部分がどのように評価されるのかということが明確に伝わらない。そのため、本プロジェクトに際しては表3のようなルーブリックを作成し、プロジェクト開始時に学生に配布をしている。

表 2 本プロジェクトの 3 領域× 3 能力+ 3 連携<sup>9)</sup>

	わかる	できる	つながる
言語	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学施設などのドイツ語表現がわかる。</li> <li>2. 伝えるための発音の重要性が分かる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学施設などの一覧表をドイツ語で作成できる。</li> <li>2. 伝達可能なドイツ語で語ることができる。</li> <li>3. 日本語訳を添えたドイツ語台本を作成することができる。</li> </ol>	
文化	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自分の大学のセールスポイントがわかる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自分の大学の価値や魅力について調べ、魅力を(再)発見できる</li> <li>2. 外国人にとって自分の大学がどのように見られるかを推測できる。</li> <li>3. 自分の大学のセールスポイントを外国人の興味・関心を惹くように説明できる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 外国人が自分の大学に対して抱く疑問点を認識し、それを解消できるように説明ができる。</li> </ol>
グローバル社会	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生自身による大学の国際発信力強化の重要性がわかる。</li> <li>2. 大学を構成する一員として、それぞれが大学にとっての外交官であり、魅力を発信する伝道師であるということがわかる。</li> <li>3. 個人が世界に情報を発信するツールとして動画が有用であり、その作成能力を身につけることの重要性がわかる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 立命館大学の学生として、グループでその魅力を語り合い、ポジティブマインドを持つことができる。</li> <li>2. 立命館大学の特長や魅力を発信するために情報を分析・吟味し、自らの考えをまとめることができる。</li> <li>3. 動画を撮影・編集し、ウェブ上にアップロードすることができる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. YouTube に動画をアップロードし、公開することで、世界に対して情報を発信することができる。</li> </ol>
三連携	<p>連携 1：立命館大学の学生として自分の大学に対する関心、愛校心          連携 2：立命館大学の学生としての自らの経験、「立命館学」          連携 3：立命館大学衣笠キャンパスおよび周辺地域、YouTube を通じて世界中の立命館大学に興味のある人々</p>		

表3 本プロジェクトの評価項目

評価基準	目標以上に達成 (4点)	目標を達成 (3点)	目標達成まで あと少し！ (2点)	目標達成まで 努力が必要 (1点)
台本 (ドイツ語) ×2	誤り(文法・スペル)がない正確な文章であり、適切な表現を用いた自然な文章で、必要な内容をきちんと伝えることができる。	誤り(文法・スペル)がない正確な文章であり、必要な内容をきちんと伝えることができる。	誤り(文法・スペル)が散見されるものの、必要な内容がある程度伝えることができる。	必要な内容を伝えようとする努力は見られるものの、誤り(文法・スペル)が多く、十分に伝達できていない。
台本 (日本語訳)	ドイツ語で伝えたい内容を十分に汲み取り、魅力的な日本語の訳を添えることができる。	ドイツ語に忠実で自然な日本語訳を添えることができる。	ドイツ語に忠実な日本語訳を作成しようとする努力が見られるが、日本語として不自然な点が残っている。	日本語に訳そうとする努力が見られず、ドイツ語と内容が大きく異なってしまう。
内容の 的確さ	伝えたい内容をうまくメリハリを付けてまとめることができる。	伝えたい内容をうまくまとめることができる。	一部に不明確な部分が残るものの、伝えたい内容をある程度うまくまとめることができる。	伝えたい内容をまとめようとする努力は見られるものの、的確にまとめることができていない。
ドイツ語 での語り	正確で聞き取りやすい発音だけでなく抑揚にも気を配って発話することができる。	正確で聞き取りやすい発音を心がけ、発話することができる。	正確で聞き取りやすい発音をしようとする努力が見られるものの、言いよどみや言い間違いが散見される。	ドイツ語を発話しようとする努力は見られるものの、相手にうまく伝わるといえるようには発話できていない。
ルール遵守	提出期限より遅れてしまった(-1) 動画が長過ぎた(3分以上)あるいは短過ぎた(1分未満)(-1)			

表3のルーブリックからも分かるように、撮影や編集に関する技術的な部分に関しては評価の対象とはなっていない。評価の基本はドイツ語(および日本語訳)に関する部分であり、撮影や編集の技術については評価対象とはしていない。

このように評価ポイントを最初に配布することで、このプロジェクトのねらいが学習者にとっても明確なものとなり、活動を進めていく上での一定の指針となることが期待される。

## 4 授業アンケートの分析と「めやす」の課題

### 4.1 授業アンケートの実施と分析

2013年12月初旬、本プロジェクト参加者に対して無記名のアンケートを行い、24名分を回収した<sup>10)</sup>。ここでは、各質問項目に関する統計と分析を試みる。

#### 4.1.1 有益だったかどうか（選択）

まず、動画作成がドイツ語学習にとって有益だったかどうかに関する問1では、次のような結果が得られた。

表4 問1集計

	かなり有益だった	それなりに役に立った	普段の学習とあまり変わらなかった	あまり役に立たなかった
文法学習	7人	12人	4人	1人
語彙学習	10人	13人	1人	0人
発音・会話練習	15人	8人	0人	1人
作文練習	14人	7人	3人	0人
聞き取り練習	6人	5人	9人	4人

半数以上が「かなり有益だった」を選択したのは「発音・会話練習」「作文練習」の2項目だった。台本を作成し、それを実践するという活動については全てのグループで共通であり、本プロジェクトの核を形成する部分であるためにこのような結果になったと考えられる。

次に「文法学習」と「語彙学習」が類似した傾向を示していることがわかる。およそ半数の学生が2の「それなりに役に立った」を選択しており、全体としてはこれもかなり効果のあった部分であるといえる。ただし、文法学習および語彙学習は、テーマやストーリーを軸において活動したグループは未習事項についてもかなり調べる必要が出てくるためにこの項目の評価が高くなる一方で、教科書等で学習済みの既存知識を中心に台本を作成したグループにとってはこの項目の評価は低くなるという可能性も考えられる。

最も評価が分かれたのは「聞き取り練習」である。3の「普段の学習とあまり変わらなかった」を選択した学生が最も多く、それ以外の項目もほぼ同じ数字である。今回のプロジェクトでは、もとより聞き取り練習についてはあまり想定していなかったこともあり、これは予想できた結果である。

#### 4.1.2 自分にとって特に有益だった部分（記述）

問2では、自分にとって特に有益だったと思う点についての記述であった。以下に解答例を挙げる<sup>11)</sup>。

- ① 普段はなかなかやらないドイツ語の作文をやったので勉強になった。
- ② 使える表現内で作文を作るのが大変だった。
- ③ よく知らない語彙を身につけられる点。
- ④ 1から自分で文章を考えてドイツ語にしたこと。
- ⑤ 人に見せるということだったので、発音には特に注意をした。
- ⑥ 実際に自分で文を作って話してみるというのはあまりできないのでよかった。
- ⑦ 今までにない取り組みだったので、新鮮でとてもおもしろかった。
- ⑧ 台本を作ることによって、それまでに習った部分を楽しく復習できる点が良かった。

- ⑨ 自分がどれだけドイツ語を理解しているかわかったこと。  
 ⑩ ドイツ語が言葉であることを実感した。

回答の多くは、①～⑤のような問1の5項目のいずれかについて特に有益だったというものだった。その中でもとりわけ台本作成に伴うドイツ語作文についての言及が目立っていた。単に文章として提出するだけであれば教員と学習者の1対1のやり取りでしかない。しかし、本プロジェクトの場合はまず第一にグループ内、そして動画として全世界に発信されるので、よりいっそう作文には気を遣っている様子がうかがえる。

また、⑥～⑩については、広くドイツ語理解にかかわる点、あるいはプロジェクトそのものに関わる点が言及されている。具体的にどの部分が有益だったというよりは、本プロジェクトを通じて楽しくドイツ語を学習することができたという観点からの回答も多かった。ドイツ語学習のモチベーション向上あるいは維持に本プロジェクトは一定の効果があったと考えられる。それは次の問3の結果からも読み取ることができる。

#### 4.1.3 学習意欲について（選択）

問3では、この動画作成を伴うプロジェクトは学習意欲向上に役立ったかどうかを問うた。その結果は次の表5である。

表5 問3集計

かなりやる気が出た	やる気が出てきた	気持ちに変化はなかった	やる気が無くなってきた
4人	16人	4人	0人

問3で大半の学生は「やる気が出てきた」を選択している。「かなりやる気が出た」および3の「気持ちに変化はなかった」は共に4人ずつの回答だったが、「やる気が無くなってきた」を選択した学生はいなかった。本プロジェクトは回答者24名中6分の5にあたる20名の学習意欲向上に貢献したということがわかる。

#### 4.1.4 またやってみたいか（選択）

問4ではまたこのような機会があればやってみたいかということを問うた。その結果は表6である。問4は問3と比較すると選択にばらつきがある。最も多かったのは賛成を示す「機会があればやってみたい」であったが、中立を示す「またやってみても構わない」も一定数みられた。各グループあるいはグループ内においても個々人の負担感にばらつきが生じていたこともこの結果につながったものと考えられる。

表6 問4集計

ぜひやってみたい	機会があればやってみたい	またやってみても構わない	もうこりごりだ
6人	11人	6人	1人

#### 4.1.5 プロジェクトの感想（記述）

問5では、プロジェクト全体についての感想を問うた。以下に回答例を挙げる<sup>12)</sup>。

- ① とても楽しかった。文法や単語の勉強にもなり、有益だった。
- ② 皆でドイツ語を調べて文を作るので、文法を自分たちで考えるなど役立つことが多かった。
- ③ 難しかったが一度やってみるとなかなかおもしろかった。
- ④ 少ない人数で大変だったけどなんとかできてよかったです。
- ⑤ あまり経験することのないことを授業を通してできたのでかなり楽しかった。
- ⑥ 1つのものを他の人とともに作り上げるというのは正課の授業と異なり自主性の高いものであったので、大変おもしろかった。
- ⑦ 撮影によってグループの仲も深まったので、とても楽しかったです。
- ⑧ 人選がすごい重要かと……。グループで作るので集まってくれる人じゃないと何もできないです。もう嫌です。

全般的に好意的な感想であるが、①～②のように学習そのものについて、③～⑦活動そのものについてのものに分かれた。否定的な感想は全体を通じて⑧の1人だけである。なお、⑧の回答者は、問4では4の「もうこりごりだ」を選択していた。

#### 4.2 本プロジェクトの振り返り

4.1のアンケート結果からも分かるように、全般的に見ると本プロジェクトは学習意欲向上に貢献し、大半の学生にとっては好評であったといえる。しかしながら、改めて本プロジェクトを振り返ると、いくつかの問題点もあった。同時に、1回目の動画作成プロジェクトから改善された点、そして予想以上に成功した点もある。

まず失敗した点が3つある。1点目に動画を YouTube で一般公開できなかったこと、2点目に発音や表現が正確さに欠けたこと、3点目に評価ポイントが未浸透であったことである。

1点目の動画を公開できなかったことについては、当初は想定していなかった著作権や肖像権の問題が生じてきたためである。多くのグループが動画内に音楽を挿入し、いくつかのグループはインタビュー形式の動画を作成したことでこうした問題が生じたのである。ただ、いずれも動画作成にあたってより工夫を使用した結果であり、否定的に捉える必要はない。当該クラスの学生は法学部所属であるため、本プロジェクトと併せて著作権法などの授業とリンクさせることができれば、他教科との連携という面でよりいっそう「めやす」の理念を実現することにつながる。これは今後の課題である。

2点目については、すべてを評価対象としたことに関係する。台本や発音などもすべて評価に含まれるため、この部分については教員からのサポートは限定的なものにせざるを得なかった。しかしながら、最終的に公開するという前提であれば、例えば一次提出のものを評価対象とし、それを添削した上で動画の撮影に臨むといった手順を踏むことで解決できると考えられる。

3点目については、動画作成にのめり込むあまり評価に対する意識が希薄になったグループもあった。ループリックは活動を始める前の段階で配布しているが、1ヶ月近くに及ぶ活動期間中でそれに再び言及することはあまりなかったことも影響していると考えられる。

また、課題として浮かび上がったのは、グループ作成の困難さである。問4および問5で否定的な回答を寄せた学生は、他のメンバーの欠席などによる負担過多がその根底にあると考えられる。比較的長期間にわたるグループでのプロジェクトにおいては、教員が学習者の特性を認識した上で、グループ間あるいは個人間における負担感のバランスを考慮してグループを作成する必要がある。

一方で、2013年度前期に行った1回目の動画作成プロジェクトの際と比較しての改善点としては、動画作成にあたり具体的な目標を提示したことにより、より深く内容を考えることができたという点が挙げられる。第1回目ではストーリー先行でドイツ語部分がおろそかになったグループもあったが、本プロジェクトではテーマと対象を限定したことで、単に「楽しさ」や「ノリ」を追求するのではなく、内容から出発することができたことが全体的な質向上につながった。また、今回は台本や単語リストも成果物として提出させ、クラス全体でそれをシェアしたことで、他のグループにとっても良い学習素材となった。各グループが調べた語彙や表現のリストを共有することはすなわちクラス全体での協働学習にもつながったと言えるだろう。

また、副専攻ドイツ語コミュニケーションコース選択者の激増という副次的な効果もあった。以下に過去8年間の推移と当該年度の選択者数の表を挙げる。

表7 ドイツ語コミュニケーションコース選択者数の推移（法学部）

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
人数	8人	7人	7人	9人	6人	4人	2人	5人	19人

表7の数字は法学部全体、すなわち5～6クラスの合計である。副専攻は2回生時より開始のため、当該クラスを含む数字は2014年度の19名となっている。このうち、当該クラスからは10名がこれを選択している。2006年度から2013年度の間で、2009年度の9人が最も多い数字を示しているが、当該クラスのみでそれをさらに上回っていることから、いかにこれが突出した数字かが分かる。このことから、本プロジェクトは学習意欲の向上だけではなく、更なる「つながり」に向けた継続学習を促進する効果もあったと考えることができる。

#### 4.3 3領域×3能力+3連携の達成度

本プロジェクトには「めやす」の理念を実行に移すという目的もあった。表2で提示した3領域×3能力+3連携の達成度を示したのが表8である。

全般的に見ると、多くの項目で目標を達成できたことがわかる。しかしながら、つながる×グローバル社会の項目1「YouTubeに動画をアップロードし、公開することで、世界に対して情報を発信することができる」は上述した理由により達成することができなかった。ただ、これをもってこのプロジェクトの根幹の部分の失敗に終わったということにはならない。「動画を公開する」という部分については未達成なことは変えようのない事実であるのだが、つながりを想定し、相手の立場や考え方を念頭に置きつつ活動することは、最終的なつながりを達成できなくとも「めやす」の理念を十分に達成することができたといえる<sup>13)</sup>。

表 8 3 領域×3 能力+3 連携の達成度<sup>14)</sup>

	わかる	できる	つながる
言語	1○ 2○	1◎ 2△ 3◎	
文化	1△	1○ 2△ 3○	1○
グローバル社会	1○ 2△ 3○	1◎ 2◎ 3○	1×
三連携	連携1○ 連携2○ 連携3△		

## 5 まとめ ～「めやす」の可能性と課題～

以上、「めやす」の概念を取り入れた授業の実践例を紹介した。本プロジェクトではとりわけ「つながる」ということを1つのキーワードとして取り組んだ。「つながる」という観点はいままであまり授業で重点を置いてこられなかった部分であり、教員にとっても学習者にとっても新鮮なものとして捉えられた。同時に、「つながる」ことを意識下に置いた上で行った活動は、それをしなかった場合のものと比較しても活動に取り組む姿勢や成果物の差となって現れた。外国語授業において「つながる」という部分は様々な面で有効に作用することから、この形式のプロジェクト授業導入を図ることは有益なものと考えられる。

しかしながら、「めやす」そのものにおいて「つながる」ということは特長の1つではあるが、それがすべてではない。「めやす」はあるプロジェクト授業を行う際に一定の指針となる枠組みであり、あるいはプロジェクト授業における行動や学習の成果、あるいは目標とそれを達成するための手段や方法を可視化するものである。3領域×3能力+3連携の表だけを取り出してみても、当該プロジェクトが具体的にどのような学習効果をもたらすものであるかを明確にすることができ、対外的な説明の際やプロジェクト授業の振り返りの際には非常に有用なものとなる。

一方で「めやす」の課題もある。3領域の「グローバル社会」は、「めやす」の理念においては単に「社会」と置き換えても同義である。しかし、「グローバル」という語が含まれていることが一見すると「外国人を含む社会」あるいは「外国と直接的にリンクした社会」などと誤解されかねない。「めやす」においては、現代社会は既にグローバル化されており、そのグローバル化された社会に生きる若者がこれをどのように理解し、運用し、これとつながっていくかということが想定されている。「グローバル社会」に秘められた意図を読み取ることが困難なことがある種の混乱を招いているといえる。

このような細かな部分についての課題は残されたままであるが、それでも「めやす」は現代社会における外国語授業の場面では有用であり、これを適切に活用していくことで教員にとっても学習者にとってもよりよい授業を組み立てることができるであろうと確信している。

### 注

- 1) 本稿は、公益財団法人国際文化フォーラム主催で2013年度に開催された「外国語学習のめやす」マスター研修で筆者自身が作成した授業プランを元に行った授業に関しての報告とその分析である。
- 2) 以下「めやす」とする。

- 3) 筆者自身も参加した2013年度の「[外国語学習のめやす] マスター研修」をはじめ、各地でこれに関する研修会やセミナーが開催されている。
- 4) 教育理念については、主として「めやす」17ページを参照。
- 5) 教育目標については、主として「めやす」18ページを参照。
- 6) 学習目標については、主として「めやす」19-29ページを参照。
- 7) この表は「めやす」22ページにある表を簡素化したものである。詳細については当該ページを参照。  
なお、ここでいう「グローバル社会」とは、「多様なことばと文化が共生する社会」のことである。また、「21世紀型スキル」とは、上記のようなグローバル社会を生き抜くために必要とされる協働力、高度思考力、情報活用力（情報・メディア・テクノロジー）のスキルのことを意味している。
- 8) 科目名や単位は独立しているものの、前期開講の「ドイツ語・基礎」の継続クラスである。
- 9) 表2および表3は「[外国語学習のめやす] マスター研修」において作成したものを改変したものである。
- 10) 質問紙は添付資料に挙げている。
- 11) 類似の回答は省略した。また、ここで挙げたものは原文ママである。
- 12) 問2と同様、類似の回答は省略しており、ここで挙げたものについては原文ママである。
- 13) 2013年1月12日に開催された「外国語授業実践ワークショップ」における山下誠氏（「めやす」提言者の1人）の解説より。
- 14) 表中の◎は「目標以上に達成」、○は「目標を達成」、△は「目標達成までもう少し」、×は「目標達成できず」を示している。なお、各項目の数字は表2のものに対応している。また、これは実践結果に基づいて行った自己判定である。

#### 参考文献

- 當作靖彦・中野佳代子 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』 公益財団法人 国際文化フォーラム、2013年。
- 當作靖彦 『NIPPON 3.0の処方箋』 講談社、2013年。

添付資料

## 動画作成プロジェクトアンケート

1. 動画を作成したことはあなたにとって有益でしたか？以下のポイントについて1～4で回答して下さい。

1. かなり有益だった      2. それなりに役に立った      3. 普段の学習とあまり変わらなかった  
4. あまり役に立たなかった

文法学習	【    】	語彙学習	【    】
発音・会話練習	【    】	作文練習	【    】
聞き取り練習	【    】		

2. 自分にとって特に有益だったと思う点について具体的に記述して下さい

3. 動画作成プロジェクトは学習意欲向上に役立ちましたか？

1. かなりやる気が出た      2. やる気が出てきた      3. 気持ちに変化は無かった  
4. やる気が無くなってきた

4. またこのような機会があればやってみたいですか？

1. ぜひやってみたい      2. 機会があればやってみたい      3. またやってみても構わない  
4. もうこりごりだ

5. 動画作成プロジェクトについての感想を簡単に述べて下さい

## Foreign Language Classes Using the *Meyasu* Concept

TAHARA Norikazu (Associate Professor, College of Law, Ritsumeikan University)

### Abstract

In 2012, the *Meyasu* (Guidelines for Learning Foreign Languages) was first published. It contains many new concepts and therefore is a good guideline for teaching foreign languages. In the winter semester of 2013/14 it was introduced to one German class at Ritsumeikan University.

This style of PBL (Project Based Learning) which aims to link students to the world yielded interesting results; namely, the maintenance of high learner motivation and the promotion of continuous learning. Some problems of *Meyasu* remain to be resolved, but it offers us new concepts and methods with which teach language.

### Keywords

Foreign Language Learning, German Teaching, *Meyasu*, Project Based Learning

